大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

誰がハイドンの首を切り取ったか〔翻訳〕

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2013-06-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ハイネ, エルンスト・ヴィルヘルム, 植田, 憲一, ペピン, ハンス・ヨアヒム メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006063

Wer enthauptete Haydn?

植　田　憲　一

Hans Joachim PEPPING 共訳

翻訳者の前書き

日本では、ドイツ文学研究者を別にすると、Ernst Wilhelm Heine はほとんど知られていない作家である。1940年ベルリン生まれのハイネはブラウンシュヴァイク工科大学（Technische Universität Braunschweig）で建築と都市開発の勉学を経て同大で助手として教鞭を取った。南アフリカに魅了された彼は1968年ヨハネスブルグに渡りそこで1973年に自分の建築事務所を設立した。

彼の文筆活動は1974年に月刊誌 Sauerkraut の発刊で始まった。1978年ドイツに帰国してから、様々なラジオ放送局のためのラジオドラマの執筆を始め、同時に講演で自らのアフリカの経験について語り、文学作品も発表した。

しかし、あくまでも文学が趣味であった彼は主として建築家として生計を立てた。ドイツで自分の趣味に没頭すると同時に、サウジアラビアのコバルで衛星都市の建築プロジェクト長を勤めた。1982年からドイツのシュトゥットガルトでエンジニアリング会社の建築部門長として働き、1984年から２年間サウジアラビア政府の建築アドバイザーとして活躍した。1986年から、やっと本格的な執筆活動に全エネルギーと時間を捧げる余裕ができた。

様々な小さな作品を執筆した彼の初めての本当に大きな成功は1993年に出版された An Bord der Titanic であった。このブラックユーモア短編集はすぐに全ドイツで人気になり、さらにファンたちの間で彼の Kille Kille Geschichten はほとんどカルト的とも言うべき地位を得た。

たが、彼がまともな文学作家として評論家に認められたのは1994年であった。その年に彼の歴史小説 Das Halsband der Taube が掲載されるとすぐにベストセラーになった。そのあと次々と新しい作品が出版される。彼の歴史小説はすべてヨーロッパの中世を舞台としている。個人的見解では、ロマンチック街道のローテンブルクの歴史を扱った本が一番読む価値がある。歴史学者でさえその本を学生に推薦するほどの作品だ。

歴史小説以外、ハイネはノンフィクションの分野でも活躍している。その中の彼の一番有名な本はおそらく Wer ermordete Mozart? と Wer enthauptete Haydn? であろう。私たちはその作品から一つの短編を選んで、できるだけ原文に忠実に日本語に翻訳した。

誰がハイドンの首を切り取ったか

エルンスト・ヴィルヘルム・ハイネ

Wer enthauptete Haydn?

ドイツ人なら誰でも、たとえ音楽が余り好きでなくてもヨーゼフ・ハイドンをドイツ国歌のメロディーの作曲家として知っている[1]。音楽史は彼を「交響曲と弦楽四重奏曲の父」と呼んでいる、というのは彼は118の交響曲と83の弦楽四重奏曲を書いたからである。

誰でもヨーゼフ・ハイドンを知っている。しかし、それでもほとんど誰も彼が首を切り取られたことは知らない。

ハイドンはモーツァルト[2] のような天才少年ではなかった。彼は田舎の生れであった。父はニーダーエスタライヒ[3] の辺鄙な田舎の馬車職人であった。ハイドンは晩熟であった、音楽ばかりでなく。同時代の人たちがすでに何人もの子持ちになった年代になって初めて、彼は女に興味を持った。彼は醜くて内気であった。彼の疱瘡跡がある顔には、いぼ状の腫れもののできた余りに大きな鼻が突き刺さっていた。ほとんど頸のない太いO脚の短い胴体の上に頭が乗っていた。今日ばかりでなく当時の目で見ても、彼は昔のフランク族の下層民のようであった。彼の服装は、お爺さんの時代ほど保守的で、いつも何十年か時代から遅れていた。彼は白粉を塗ったかつらが好きで、もう長い間流行っていないのにそれをつけていた。30代の頃にはすでに、老年層からも若年層からも「パパ・ハイドン」と呼ばれた。情愛的な感情は彼の人生では、もぐらの一生の日光のようなものだった。彼の結婚は最初から悲惨であった。口やかましい、かつら作りの娘はハイドンの手書きの楽譜をケーキの敷物に使った。ハイドンは彼女のことを嘆いて言った。「彼女は全然素養がない。夫が靴職人であろうが芸術家であろうがまっ

たく同じだ。」それでも彼は20年もの間結婚に誠実であった。もちろんハイドンも、その時代芸術家がそうであろうと思われていたように他の女性との関係はあったが、これらの親交はほとんど精神的なものを越えることはなかった。まだ彼の妻が生きているときに彼はあるイギリスの未亡人を敬愛していたが、彼女のことを彼は「もし私が結婚していなければ、彼女と結婚していただろう。」と言った。しかしこの彼の心の女性がすでに60歳を越えていたことを知れば、この「情熱」もまた文通友人の関係であることが分かろう。同じく不幸な結婚をしていた19歳のイタリアのオペラ歌手に、もし彼女が自由の身になったら結婚しようと彼は約束をした。しかしその後彼の妻が実際に死んだ時、彼はさっさと逃げてしまった。パパ・ハイドンには一つの情熱しかなく、そしてそれは彼の音楽であった。何も、全く何もこの善良市民的天才に、盗賊の首領のように首を切り取られるきざしなどなかった。しかし、それでもそのようになったのだ。

日没直後に砲兵隊が砲火を開始した。雷鳴のように砲撃が静かな町を飛び交った。砲弾が気を失わさせるような轟音で炸裂した。火事が起こった。人も動物も不安に見開かれた目で道を右往左往した。命令が苦痛の叫びと混じりあった。子供たちは泣いた。町の城壁の前でドラムが打ち鳴らされた[4]。

シュタインガッセ19番の家の前の石畳の上で、砲弾が爆発した。爆風が窓ガラスを粉々に砕き、蝶番から庭扉を引きちぎり、見えないパンチで蝋燭の光を消した。衰弱した主人をベッドに運んでいた、がに股の従僕と丸ぽちゃの料理女は、恐ろしさのあまりガタガタ震えて床に身を伏せた。途方に暮れて、この老人は暗闇の中に立ち続けた。「怖がることはない」と彼は言った、「ハイドンがいるところではお前たちに何も起こるはずがない。」

その翌朝、包囲された町は降伏した。

ナポレオン・ボナパルトは、かつてマリア・テレジア女帝の堂々たる居城であったシェーンブルン城に宿営を移した。ウィーンは新しい主人を迎えた。ドナウ橋は進駐連隊の重々しい行進の下で轟音をたてた。皇帝フランツ[5] は闇夜に紛れて、盗人のように逃げた。

シュタインガッセ19番では、77歳のヨーゼフ・ハイドンは従僕にわが身をクラヴィーアに運ばせた。彼は、通りに面した窓という窓を開くように命じ — ガラスはどのみち全部割れていたのでむだな行為であったが — そして彼が10年前に皇帝と民衆に捧げ、後に詩人ホフマン・フォン・ファラースレーベン[6] の歌詞によってドイツの国歌になるはずの、あの賛歌「神よ、皇帝フランツを守り給え！」を演奏した。

その日から彼の死の日まで毎日、ハイドンはこの賛歌を演奏した。彼はそれをそのようにパルチザン的な抵抗心で演奏したので、通りの人々は立ち止まりそして帽子を脱いだ。それは本来恩知らずな行いであった、というのはフランス人は彼をそのアカデミー会員に任命したばかりではなく、すでに生前からフランスでもほんのわずかな音楽家にしか与えられない栄誉を与えていたからである。

ナポレオンは自分自身がハイドンと運命的に結ばれていると感じていた。1800年12月24日、新世紀[7] の最初の聖夜に、この皇帝[8] は、ハイドンの「天地創造」のパリ初演がお祭りの

華やかさで祝われることになっていたオペラ座に行く途上で、間一髪死を免れた。新聞は奇跡だと書いた。狭いニセーズ通りで、数十キロもの石の破片が家々の屋根を越えて飛ばされるほどの激烈な力を持ったいまいましい装置が、皇帝の馬車のほんの２－３メートル後ろで爆発した。40人もの人間が、手足がバラバラになり血に染まって倒れていた。ボナパルトは、あたかも何事もなかったかのように車を進めさせた。そして表情を変えず、彫刻のように動かずに皇帝席に座り、天地創造の響きに耳を傾けたが、一方ジョゼフィーヌは。彼の脇でひどく泣きじゃくっていた。上演の後彼は「ハイドンは正しい、すべての創造の力は死より強い。」と語った。

ウィーンが征服されて間もなく、1809年５月に若いフランス士官がシュタインガッセ19番の扉を叩いた。扉が開けられなかったので、彼はサーベルのつかを使って大きな音で開けるよう要求した。忠実なヨーハンはそのフランス人が主人の高価な銀食器を略奪すると思い、急いで中からすべてのかんぬきをかけていた。その士官は敵だと思われていることが分かり、ドイツ語とイタリア語のごちゃまぜの言葉で叫んだ「ソノ　アミーコ、私は友達です。ソノ　アミーコ。マエストロに一目お目に掛り、敬意を表したいのです。」

やっと中に入れてもらえた彼はハイドンの部屋に飛び込み、軍隊式敬礼をして告げた「クレマン・ソレムニー、第5軽騎兵連隊大尉で、平時の職業は歌手です。マエストロにオラトリオ『天地創造』の演奏のお許しを賜りたいのです。」

まったくもって驚いたハイドンは、毎日フランス人に戦いを宣告していたクラヴィーアに自らを運ばせた。若いフランス人大尉は澄んだ驚くほどの力強い声で歌い、老巨匠は自らの手で伴奏した。この驚くべき何分間の間は、戦いも敵対心も忘れられていた。通りすがりの人たちで道は滞った。最後の音が鳴り響いたとき、途方もない歓声が沸き上がった。若いフランス人と老巨匠は至福のあまり互いの腕に崩れ落ちた。ハイドンは感動の余り子供のように泣いた。

次の日の朝、彼はベッドを離れるには余りに弱っていた。彼は明確に自分の死期を悟った。一番どりが朝を告げた時、ハイドンは死んでいた。1809年5月31日と記されている。

がに股の従僕ヨーハン・エスラーは、主人の死を管轄の警官駐在所に届けた。こちらはフランスの司令官マレー将軍に報告したが、さらにその将軍が死亡報告をナポレオンに伝えた。皇帝の命により、シュタインガッセ19番の家の前に、軍の儀仗兵が繰り出した。

シュテファン大聖堂での公葬のとき、抜かれた剣を掲げたナポレオン軍の士官たちが、豪華に飾りつけた偉大な死者の棺台の側に立った。モーツァルトのレクイエムで、ウィーンはその市の最も重要な息子のうちの一人に最後の別れを告げた。半世紀のあいだにハイドンは巨大な量の音楽作品を生み出した。彼は100を越える交響曲、弦楽四重奏曲とピアノソナタ、100を遥かに超えるミサと20のオペラと、その中の「天地創造」と「四季」だけでも彼の名前を不滅にするに足るオラトリオを残した。フンツトゥルマー墓地に最後の安らぎを得てハイドンは埋葬された。

1820年に ハイドンが死んで11年が経過していたが、ニコラウス・エスターハージ侯爵[9]は招待した小さな集まりの前で「天地創造」を演奏させた。演奏会の後ケンブリッジ公爵が

(10) エスターハージ侯爵に言った「あなたはこの人を生前からご存じであったばかりでなく、彼の遺体をあなたの先祖代々の墓所に安置する喜びをお持ちなのが、うらやましい。」

ヨーゼフ・ハイドンをアイゼンシュタットのエスターハージ侯爵の先祖代々の安置所に埋葬すると定められた遺志のようなものは確かにあったが、戦争の混乱によってこの計画はまだ実行に移すことができていなかった。エスターハージは逸機を取り戻すべく、すぐさまそれに着手した。

2－3日後に、ウィーンのフンツトゥルマー墓地でハイドンの遺体が発掘された。まだ全く破損していないオークの棺が開かれて、予想通り骨格が見つかった。11年が経過しただけのことはあった。棺の上端には腐敗した絹の枕の上に、よく残っているハイドンのかつらがあった。しかし居合わせた皆がぞっとする驚きで見た ― 頭と上から3番目までの頸椎がなかったのだ。誰かがハイドンの首を切り取っていたのであった。エスターハージ侯爵は警察を呼んだ。

ただちに開始した調査の結果は、切断は死後硬直からそれほど日数が経たないうち、あるいはその直後に行われたとのことであった。まだ埋葬前かその直後に、鋸歯ナイフで死体から頭が切り離された。頸椎には、犯人が2つの頸椎骨の間をぶきっちょに切ろうとし、その度毎に固い骨の塊に突き当ったようなギザギザの跡があった。その男は喉から首すじまで切断し、そしてそれを大急ぎでやったようであった。

その出来事が10年以上前のことであったにもかかわらず、警察は手掛かりを見つけ、ネポムク・ペーターという男にたどり着いた。この男の名前が珍しかったばかりではなく、彼はもっと珍しい趣味で広く知られていた。彼は他の人なら切手や蝶を集めるように、死骸の頭蓋骨を蒐集していた。ネポムク・ペーターは埋葬の1週間後に彼の友人ローゼンバウムと、ハイドンの棺を密かに掘り返した、と調書を取らせた。そして家畜小屋のランタンの光のもとでローゼンバウムが肉屋用のナイフで頭を胴体から切り離したが、これは死体のしわしわの皮膚が皮のように堅く締まっていたので、かろうじてできた大変骨の折れる仕事であったとのことである。引っかかりながら切断する動きが、咽頭で死体があたかも回らない舌でしゃべっているかのように聞こえる音を出したとのことである。

ローゼンバウムがやっと頭を胴体からもぎ取ったあと、二人の男は棺を閉め、誰もこのような身の毛もよだつこと起こったことなど分からないように、それを埋め戻した。曙光が射す中ヨーロッパ中の音楽愛好家がまだ死を悼んでいる男の頭を、からの穀物袋に入れて家に運んだ。ネポムク・ペーターはすでに腐敗臭がする頭蓋骨を箱の中のおがくずに突っ込み、風呂に入り、いつもと同じように時間通り役所に行った。彼はニーダーエスターライヒ地方刑務所の国家公務員であった。まだその日のうちに彼は肉の除去に取りかかった。細心の注意を払って、彼は脳みそ、眼、耳、舌、そして頭皮を取り除き、骨格から顔の前半分の肉を剥がした。彼は頭蓋骨を化学液で洗浄し、そして漂白した。その後彼は一連の測定に取りかかった、というのはネポムク・ペーターは、人間の精神的な能力とその頭蓋骨の形との間には直接測定可能な関係があると学説で主張していた医者フランツ・ヨーゼフ・ガル(11) の筋金入りの信奉者であったからである。もし当時よく知られていたこの間違った学説に一片の真理があるとすれば、ネポ

ムク・ペーターの頭はペルカルトッフェル[12] のようであったに違いない。彼はハイドンの死体凌辱を王家の谷の発掘のように語った。彼の「研究」に引き続き彼は死者の頭蓋骨を彼の友人ローゼンバウムに手渡したが、こちらはそれを「ハイドンの魂がウジ虫や虫けらによって破壊される、あるいは半人半獣、えせ哲学者やたちの悪い若造が彼を愚弄するのを防ぐためにと釈明したのだが彼のミニ大霊廟にしまい込んだ。

ローゼンバウム宅での家宅捜査は成果なく終わった。警察は捜索中のハイドンの頭を見つけることは出来なかった、というのは彼は発熱性インフルエンザでベッドで寝ていたローゼンバウム夫人のベッドカバーの下に隠していたからであった。ローゼンバウムは、ウィーンの警察官は女性のベッドカバーの下を覗くような非礼なことはしないだろうと高を括っていたが、正しかった。エスターハージ侯爵は、警察の捜査が成果を得なかったのを知って、二人の首狩り人に侯爵に相応しい多額の金額を申し出た。そこで信じられないほどの値切り交渉が始まった。やっとある額にまとまり、頭蓋骨がアイゼンシュタットに運ばれた後で、二人の解剖学教授がこの頭は若い娘の体のものだと判定した。エスターハージは異議を申し立て、今度は明らかに高齢で死んだ男の頭蓋骨を入手した。こちらは聖遺物のようにアイゼンシュタットに移送され、お祭りの華やかさで、棺の中の頭のないハイドンの骨に添えられた。やっとこの音楽歴史上の最も恐ろしい物語は終わりを迎えた。

しかし見かけは当てにならなかった。死の床でローゼンバウムは、あの値打ちのある頭蓋骨をまだずっと所有しており、生きている間はそれと離れたくないと打ち明けた。その後その頭は様々な人の手に渡り、やっとウィーン楽友協会の所有になったが、ウィーンの人々をしてその聖遺物を引き渡す気にならせるためには、まず州政府の決断が必要になった。

1954年６月５日、ハイドンの頭への二度目の公葬が取り行われることになった。ただ今回はそれは1809年のように金色に染めたオークの葉ではなく、芍薬の新鮮な花で飾られた。それは枢機卿大司教によって棺台に安置され、清められ、荘重な葬祭列を連ねてハイドンの生誕地ローラウ村に運ばれた。ここでは歓迎のために鐘という鐘が鳴り響いた。弦楽四重奏団が2つのソナタを演奏し、それから行進はアイゼンシュタットに進み、ここのエスターハージ侯爵の宮廷の中庭で長い弔辞が述べられた。「栄光にふさわしい主よ」[13] と少年合唱団が歌った。

あのにせの頭がこっそりと取り去られた後、やっと頭蓋骨が棺の体に添えられた。どのような老人が２－３年間代理の頭としてヨーゼフ・ハイドンの傍らに置かれる栄誉を受けたのかを調べて見るのは、間違いなく特別に興味を引く物語であろう。

ほとんど150年近く後に、凌辱された死者はついに最後の安らぎを見つけた。今アイゼンシュタットに安らぐ頭蓋骨が本物であるということについては疑いがない、と専門家たちは主張しているし、そして恐らくそれは正しいであろうが・・・

注

（1）1732－1809、Kaiserquartett C-Dur、op. 76、Nr. 3。

（2）1756－1791。

（3）オーストリア東部の地方。

（4）　処刑執行の合図。

（5）1768－1835、マリア・テレジアの孫。

（6）1798－1874。

（7）正確には1800年は18世紀の最後の年。

（8）Napoleon が実際に皇帝になったのは1804年。

（9）1765－1833、　ハンガリーの貴族。ハイドンの最後のパトロン。

（10）1774－1850、英国王ジョージⅢの子。

（11）Franz Joseph Gall、1758－1828。

（12）小さな皮つきゆでジャガイモ。

（13）Aus dem Danklied zu Gott（Hob.XXVc:8）。

Wer enthauptete Haydn?

Kenichi UEDA und Hans Joachim PEPPING

Bei unserem Beitrag handelt es sich um eine kommentierte Übersetzung eines Textes des zeitgenössischen deutschen Schriftstellers *E. W. Heine*, der in seiner Erzählung *Wer enthauptete Haydn?* die Umstände dieses mysteriösen Verbrechens aufdeckt. Der Text ist bedeutend, weil er ein Licht wirft auf die Anfänge der Eugenik.